

股間の花びらフラワリングナイト体験版…メイドと痴女懐中時計

近頃、夜の人里に、痴女が現れるという噂が流れている。

その女は袋を被り、そこから下はなにも身に着けておらず、出会った者に対して自分の裸体を見せつけながら、何かしらの下品な行為にふけているのだという。

そんな張り紙が、里の寂れた通りの、路地の入り口に貼ってあった。

世の中にはいろいろな変態がいるものだ——それが男であろうと、女であろうと、咲夜には理解できない話だった。一体どうして、自らの尊厳を傷つけるようなことをするのか。きつと、別の世界の人間かなにかなのだろう。

理解できない張り紙に別れを告げ、咲夜は路地に入っていく

滅多に人が通らないのだから道は苔むし、どこからか飛んできたらしいゴミや落ち葉が吹きだまっている。途中で建物に遮られ折れたり分岐したりしていたが、彼女は目的地とそこまでの道のりを把握している足取りで進む。やがて、どん詰まりに至った。長く忘れ去られたその場所の地面は苔まみれで湿り、建物の壁面には何かの蔦が巻き付いている。こんなところにはなにもないと十人中十人が答えそうな、実に寂れた場所だった。だが、彼女の目的地は、間違いなくここなのだ。

行き止まりの隅には、大型のゴミ箱が設置されている。こんなところに、誰もゴミなど捨てに来たりはしないだろうに。さらに奇妙なことには、時間が十年前で止まったような場所で、その箱だけはやけに新しくなった。

懷から鍵を取り出す。銀製の、真新しい鍵だ。ゴミ箱にかけられた錠を外す。この箱をここに持ち込んだのは、他ならぬ彼女だった。誰かに使ってもらうためではない。むしろ使われると困るから、わざわざこんな場所を選んだのだ。

ゴミ箱の中には、ゴミなど入っていなかった。いくつかの、これも比較的新しい物品が放り込まれていた。ただし、どれもまともなものではない。ピンク色をした張り型やら、怪しげな薬品やら、クロッチのあたりが開いた下着やら、まるでそういう筋の店の商品棚でも見ているかのようなだった。それら全て、彼女の私物である。

懷中時計を見る。十二時きっかりを示している。朝の仕事までは、残り六時間。今日はたっぷり楽しめそうだ——いや、いやいや。楽しむとはなんだろう？ これからすることは、十六夜咲夜とまったく関係がない、どこかの誰かがすることだ。

時計の竜頭を引き抜く。それは、能力発動のための儀式だった。ここのような場所だと、時間が動いていても止まっても大差がなく分かりにくい。だから、秒針の動きで判断するようにはしていた。それがいつしか習慣となり、今ではこれをしないと能力を使えない。

秒針が止まっていることを確認してから、咲夜はおもむろに、自らの衣服に手をかける。まずはベスト、ついでブラウス。その下に隠されていた肌が、あらわになる。

透き通るような肌という表現があるが、彼女の肌はまさにそれだった。シミ一つありはしない滑らかな肌は、職人が丹精込めて織り上げたシルクよりもさらに上等できめ細かだ。鎖骨のくぼみは白い肌に控えめなアクセントを与え、腰回りの僅かなくびれば、男女関係なしに魅了する曲線を描いている。

背中に手を回す。ブラのホックを外す。覆われていた乳房があらわになる。ブラは大抵、胸の形を整えてくれるものだが、こと彼女においてはむしろ逆であるようにすら見える。彼女の乳房が描く曲線は、未知の数学理論に基づいて一寸の狂いもなく削り出されたかのような、完璧なものだった。先端は膨らみ、ぴんと尖ってやや上向いている。

完全なメイドは、その美しさも完全でなくてはならない。そう主張しているかのような肉体だった。そのようなものが、月下に晒されている。この瞬間を写真にでもおさめれば、撮影者は、被写体の素晴らしさにより一流のカメラマンとしての扱いを受けられるだろう。しかし、それで終わりではなかった。続いて咲夜は、スカートに手をかける。躊躇なく、外す。ふあざりと音を立てて、それは地に落ちる。

しなやかで美しい脚の表現に、カモシカのようなというのがあす。咲夜の脚をそう形容

するのは、いささかどころでなく不適切だろう。

その脚のしなやかさときたら、カモシカと比較してすら比べものにならないほどだった。一切の過不足なく筋肉と脂肪をつけたふくらはぎと太腿が描くラインは、見る者全てに、頬ずりしたい、口づけしてみたいと考えさせる魔力を孕んでいる。

華奢な腰回りや、きゆうつと引き締まった尻肉を覆うのは、紅魔館のメイド長が使うに相応しい、上等な黒のパンティだ。肌の白とのコントラストが眩しい。クロツチのあたりだけ、色が濃くなっている。湿っているのだ。当然だが、尿漏れなどではない。

それを外してしまえば、あとは靴が残っているくらいで、全裸とわかっていいような姿になる。彼女もそのことは理解しており、やや躊躇うような間があった——いや、躊躇っていたのではない。期待に震えていたのだ。屋外という、一般的にいつて裸になるべきではない場所で裸になることへの期待に。

ウエストに手を這わせる。布地に指をかけ、ゆっくりと降ろしていく。秘められるべき場所を守るための布が、その役割を剥奪されようとしている。咲夜の息はあがっている。頬も肌も、紅潮している。興奮を、如実に表していた。

生地が秘部から離れる瞬間、小さな水音がした。女の象徴である裂け目からクロツチにかけて、ねっとりとした糸が引いていた。彼女自身の体液だ。その液体がどのようなとき

に分泌されるものであるかは、語るまでもないことだろう。淡い草むらに守られた彼女の秘裂は、ねっとりとした蜜をたたえている。これから行われることへの期待と、もう我慢ができないという主張、両方が如実に表れていた。

両脚を引き抜く。くしゃくしゃの布きれが。手の中で丸められる。これで、彼女の肉体を他者の視線から守ってくれるものは、もはや何一つとして存在しなくなった。

人目につかないとはいえ、ここは立派に屋外だ。間違つても、年頃の女性が裸になつていい場所ではない。ぞくりと、寒くもないのに身体が震える。言葉の通じない国に、突然放り出されたような疎外感を覚えた。ほんの数枚の布きれがないだけで、ここまで世界が違つて感じられるものなのだ。

この状態での、夜の散歩。

それが、咲夜の最近の趣味だった。

まるで気違い沙汰だ。しかし実は、まだ終わりではない。さらなる狂気のトッピングをして、ようやく心から楽しめる。

その一つが、時間だ。今は時間が止まっている。外で素っ裸になつたところで、絶対に誰にも知覚されない。下手をすれば、家の中より安全だ。スリルがない。つまらない。

かといって、このまま時を動かすわけにはいかない。巫女や魔法使いほどではないが、

幻想郷縁起のおかげで自分もそれなりの知名度を得た。誰かに見つければ、十六夜咲夜と分かってしまう。紅魔館の、ひいてはレミリア・スカーレットの顔に泥を塗るようなことだけは許されない。

なので、対策が必要だ。といつても、簡単なことだ。顔を見られなければいいのだから。服をたたみ、ゴミ箱に放る。代わりに、袋を取り出した。穴が三つ開いた、布製の袋だ。被る。ぴったりだった。開いた穴はそれぞれ、ちょうど目と口のところにくる。これで安心だ。誰かに見つかったとしても、少なくとも人相は分からない。

トッピングの一つが終わったところで、興奮に震える指を押さえつつ、懷中時計の竜頭を押し込む。秒針が、世界が動き出す。

動き出したといつても、この寂れた場所では一見、なんの変化もない。しかし実際には、全く違う。もう、いつどこで誰に見られても、おかしくはないのだ。そう考えるだけで、無数の視線の下にさらされているように感じ、ぞくぞくとしたものが全身を駆け抜ける。

「ああッ……」

恍惚に膝がかくついた。壁に手をつきながら、トッピングの二つ目にとりかかると。

箱の中を漁り、道具を取り出す。男根を模した、黒光りする張り型。肉幹にあたる部分には、いくつもの瘤があしらわれている。どう見ても上級者向けの、えげつない代物だ。

どう見ても上級者向けであるそれらを、彼女は剥き出しにされた女の穴に押し当てて。ローションは必要ないだろう。滴っている蜜が、潤滑油代わりになってくれる。

「んほあっ、はおっ、おっ、おおっ」

ず、ぐぬぬと、ゆっくりゆっくり潜り込ませていく。肉が割り開かれる感覚と、それにとりまわす快楽に、思わず声が零れる。普段の彼女からはちよつと想像のつかない、下品な声だった。構うものか。どうせ誰なのかバレはしないのだから。

張り型は半ばほどまでねじ込まれている。強烈な刺激と快楽に、彼女の腰は蠢いている。「ほっ、オオツ、ああ」

ぬぶぬぶと、さらに張り型を沈めていく。愛液が溢れ出し、太腿のあたりに滴って透明な筋を作る。これだけ太い張り型であるから、圧迫感もかなりのものだ。その分、快感もやがて、張り型の先端が、行き止まりに当たる。膣穴の最奥、子宮の入り口にまで辿り着いたのだ。それでもなおぐりぐりと押し込んでやると、脳髄に響くような快感が走る。口端から涎が垂れているのを感じた。

「あッ……は、ああ」

砕けそうになる腰を、膝を、ゴミ箱によりかかって支える。少しばかり飛ばしすぎた。夜はまだ長い。もつと時間をかけてじっくりと楽しまなくては、損というものだった。

呼吸を整える。ゴミ箱の蓋を閉めて鍵をかける。衣服はもちろん、懷中時計もその中だ。懷中時計がなければ、能力を使うことはできない。だからこそ良いのだ。いかに時間動く中を裸でうろついたりしても、危なくなればいつでも時間を止めれば良いという保険があれば、スリルは半減してしまう。

だからいつそ、そんなものは放棄してしまう。最高にクレバーで、クレイジーだった。けれども。けれどもだ。これだけして、なおも咲夜は満足していなかった。あと一つ、最後のトッピングが残っている。最高のスリルを与えてくれるものが。

それは、この鍵だ。ゴミ箱の鍵。これがないと服を着られない。能力も使えない。何があっても、絶対になくしてはならないものだ。

なので、あえて、なくす。

振りかぶる。そして、掌に包み込んだそれを、思い切り放り投げた。小さな金属塊は、あつという間に闇夜に紛れ、見えなくなってしまう。

人々が起きてくるまで、あと六時間ほど。それが、社会的死までのタイムリミットだ。もちろん、夜中とはいえ外を出歩いている者もいるだろうから、見つからないよう細心の注意を払わなくてはならない。

これが彼女の、夜の散歩だった。

「いひッ……」

恍惚に、咲夜は軽い絶頂すら覚えていた。こんなスリルは、他の行為では絶対に味わえない。だからこそ、こんな異常な行為が、やめられないでいるのだ。

一歩踏み出す。膝はかくつくし、腰回りはふわふわする。ふらつく足取りは、酔っ払いを連想させる。膣穴にずっぽりと入り込んだ、張り型のせいだ。

来た道を戻っていく。身体の内から溢れ出す蜜が、秘裂から太腿、膝、ふくらはぎへと、小川のように筋を作る。歩いたあとの地面には、ぽつぽつと、濡れた跡が残されていた。呼吸は荒く、肌は紅い。うっすらとだが、汗もかいている。興奮が、端的に表されている。こんなになんたら歩いている場合ではない。タイムリミットまではまだ時間があるとはいえ、ベットされたものの重さを考えれば、半狂乱になりながら必死こいて探し回るのが当然だ。だというのに、こんな風に張り型を啜え込んで歩いているのは、事態をまともに認識できているとは思えない——己のしていることの愚かさ、彼女は愉悅を覚えていた。狭い路地をかくぐりつつ、咲夜はかつてのことを思い出す。自分がこの遊びにふけるようになったきっかけを。

数ヶ月前のことだ。あの日は買い出しに出かけ、色々あつて帰りが深夜にずれ込んだ。そして、夜道で出会ったのだ。「師匠」に。

それは、露出狂だった。ちやうど今の自分のように紙袋を被つて顔を隠した、中年男性だった。月下に惜しげもなく晒されただらしのない肉体と、その股間から反り勃つ肉棒を見、咲夜は尋常でない衝撃を受け、その場から逃げ出した。

犯されると思ったのではない。襲いかかつてきたなら、どうとでも撃退できる。ただ、羨ましいと感じた。ああまで己をさらけ出せるなんていいなあ、と。そして気づかされた。自らを解き放つことを悦びとする、己の本質に。

初めは戸惑った。なにせそれは、メイドのあり方とは対極的な考え方で、しかも社会的に認められないものだったのだ。だが、ようやく見つけた真の自分を無視し続けるなど、できることではなかった。

結局、今の遊びにふけるようになるまで、そう時間はかからなかった。

今では、メイドとしての表の生活に潤いを与えてくれる、大切な趣味となっている。

そうこうしているうちに、隘路を抜けた。ここからは、大通りだ。忘れられた路地ではない。いつどこで誰と出くわしても、おかしくはないのだ。その緊張感は、弾幕ごっこや命を賭けたやりとりと比べてすら、比較にならないほどだ。全身の毛が逆立つような感覚に、思わず震えた。

「うふっ」

張り紙を改めて見る。痴女出没注意というあれだ。袋を被っただけの全裸——まさしく、今の咲夜だった。痴女というのは、つまり彼女のことだった。自分も有名になったものだから、おっと、有名なのは十六夜咲夜ではなく、謎の痴女だったか。

さて。とりあえずは、最初にすべきことがある。この路地の入り口を、塞ぐことだ。

衣服を隠したあの場所は、おそらく自分以外の誰も知らないか、興味に留めていない。だが、それは誰も来ないことを百パーセント保証してくれはしない。大事なものが入っているとかわからないよう、入れ物はあえてゴミ箱をチョイスしたが、それでもわざわざ漁る暇で物好きなアンポンタンもいるかもしれない。

非常に困る。せっかく鍵を見つけても、服が持ち去られては意味がない。だから、そもそも誰もそこに辿り着けなくなるよう、入り口を封鎖してしまうのだ。社会的な死のかかったこのゲームで、この路地だけは、安全地帯といえる場所になる。

能力が使えるれば、紅魔館を拡張したやり方の応用で、物理的に侵入不可能な空間を作ることが出来る。だが今、能力は使えない。だから、他の手段をとることにする。

要するに、ここは私の領域だと示せばよいのだ。そして、生物は昔からそうするための方法を知っている。長い歴史の中で人はそれを忘れてしまったが、なに、簡単に再現できる。四つん這いになり、路地の入り口に尻を向ける。脚が汚れないように、片脚を上げる。

そしておもむろに、己の股に込められていた力を、ほんの少し緩めた。

「あはあああッ……」

ほどなくして、それは溢れ出し始めた。放物線を描き空中に放たれ、物理法則に従って地面に落下する。しゃあああ、と、僅かな水音が鳴り、土が濡れて黒く染まっていくな。

自慰を含む性行為で得られるのとはまた異なる、生物としての根源に関わるような快感を覚える。安らぐような、恍惚の聲が漏れ出した。外であるからこそ、なお気持ちが良い。彼女は、排尿していた。それで地面を濡らし、ここは自分のものだと言いつつ主張するのだ。動物の間でよく見られる行動——マーキングだった。

こうして縄張りとしてしまえば、まさか誰も入ってくるまい。

ずいぶん溜まっていたのか、マーキングが終わる頃には、地面には円形にシミができていた。発情した動物の、鼻を刺すようなフェロモンの香りが、つんと漂ってくる。

「わん、わん」

まるで本物のメス犬だった。ちょうど股間に、尻尾も生えていることだし。おもむろに、それを片手で掴んだ。排尿の興奮は、彼女を性的にも昂ぶらせていた。ここらで一発処理しておかないと、鍵を探すだけの集中力の確保すらむずかしいだろう。

「あはッ、ンッ、ンンン……くッ」

ぬるぬると、ゆっくり引き抜いていく。甘ったるい感覚の中に、張り型にあしらわれた瘤による刺激がアクセントとなって、身体が痙攣するような快感を与えてくれる。膣口を瘤が押し広げながら出て行く感覚がたまらなかつた。

「ッはあ、ッあつ、あつは、アアッ」

引き抜いたそれを、また押し込んでいく。膣壁が捲られ、蹂躪されていく。この、肉が割り開かれる感覚が、たまらなく好きだった。おそらくは、女、というか雌としての本能的な部分が、何かをねじ込まれることに対して悦びを感じているのだろう。

「くひいいッ……ア」

先端が、奥の奥に突き当たる。ぐりぐりと、痛くない程度に刺激する。何をどうしても堪えられないたぐいの快楽が、身体の末端にまで届く。爪先がぴいんと張っては弛緩する。身体は蛇火花のようにくねっていた。

いつときの欲求に負けてこんな馬鹿なことをしている場合ではない。鍵を探さなくてはならない。自分の中に残っている比較的まともな部分が警告してくる。だが彼女は今や、焦燥感すら快楽のためのスパイスとして利用していた。

「んはッ、おッ、ッは、ひっ、あッアッアッ、ほおッ、んッひー！」

張り型を抜き差しする。リズムに乗せ、自らの女穴を耕していく。ぢゅぶっ、ぐぢゅと、

挽肉をこねるような耳に残る音が響く。腕のストロークのたびに、溢れ出した蜜が飛沫となり、彼女の指を、腕を、地面を濡らしていく。

「ンーツ、ンーツ、つアは、ツお、つあつく！」

たまらない。まったく自慰の快楽というのは、一度手を出すとやみつきになるものだ。腰をいやらしくくねらせ、全身をびくびくと跳ねさせながら、誰が見ているとも知れない場所でのオナニーに、彼女は没頭していく。

「ツはあ、オツ！つひ、んおあ、つへ、つひ、あつは」

声も仕草も、淫らに、下品に、いやらしく。ここにいるのは十六夜咲夜ではなく、謎の痴女だ。痴女である以上は、下品である方がむしろ相応しいということになる。それに、たまの僅かな一人の楽しみ時間なのだ。そんなときぐらい、己の立場を忘れるのもアリだろう。

「あつは、ああおんツ……あ」

視線を感じた。見渡す。少し向こうの物陰から、誰かが見ていた。

やや体勢を変え、張り型を啞え込む肉穴が見えやすいようにしてやる。脚を押し広げるサービス付きだ。それで、向けられた視線が濃くなった。やはり、気のせいではない。

「ツあは、ツああー……つひ！ あつはあ！」

先ほどよりもより大きなストロークで、張り型を抜き差しする。よりはなはだしく腰をくねらせ、淫らに喘いでみせる。秘部に、粘液のように視線が浴びせかけられる。痴態を凝視されているという事実は、快楽を何倍にも増幅する。

最高のショーだ。だが——ショーというものは、見てもらって終わりではない。観客に参加してもらってこそだろう。

立ち上がり、近づく。平凡な外見の青年だった。痴女が近づいてくることに気づいたか、彼はびくりと身体を震わせたが、結局逃げはしなかった。

「うふふ、こんばんは。どうしたのかしら？　こんな夜更けに」

「え、あ、いやその、えっと、あの」

男は顔を茹で蛸のようにし、こちらが近づくと、逃れるようにじりじりと下がっていく。その割に、視線は肉体へと注がれていた。とくに、類い希な美しい形を保つ柔らかな乳房と、無機物をばつくりと啞え込んで涎をだらだらと垂らす女穴を。

「噂の痴女っていうのを、探しにきたんでしょ、違うかしら？」

「う、あう」

しどろもどろだ。どうせ間違っていないのだから、潔く認めてしまえばいいだろうに、男というのはどうも、自らのスケベ心を指摘されることに弱いらしい。そのわりに、股間

のモノは、服の上から見ても分かるほどに勃起していた。なにせ十六夜咲夜の——いや、ここにいるのは謎の変態痴女であるが——肉体だ。そこらの売春宿ではお目にかかれぬ、上玉中の上玉、極上の肢体だ。これで勃たなければ、そいつにはそもそもペニスがないのだ。「それで？　めでたく見つけられたわけだけど、何をしてほしかったのかしら。それとも何をしたかった、かしら、まあどっちでもいいけど、ふふ」

「ツクう!？」

十六夜咲夜なら、自分の姿で欲情などされようものなら、逆上してその汚いモノを切り取っていただろう。ここにいるのは痴女なので、そんな恐ろしいことはしない。

男の身体が跳ねる。とくに顎が、分かりやすく跳ね上がった。衣服の上から、膨らんだモノを撫でてやったのだ。

「リクエストがあつたとしても、聞いてあげないけど。これは私の余暇の楽しみだもの。私がやりたいように、好きなようにやるの」

実のところ、青年が自分の好きなようにしに来たら、好きなようにされてやるのも悪くないと思つている。男を挑発して誘い、組み敷かれる——そのほうが痴女っぽい。

が、彼は何のアクションもとらない。予想外の状況に戸惑つていようだった。強引さが足りない。それならそれで、本当に好きなようにやらせてもらうだけだ。

「安心して、悪いようにはしないわ。とつても良くしてあげる」

膝を曲げ、腰を落とす。彼の下に跪く。近くで見ると、衣服にテントが形作られているのはつきりと分かる。その正直さに好感を覚え、根元から先端にかけて再び撫でてやる。そのまま、先端から根元へ往復する。

「ッあ、あああ」

肺の奥からひねり出したような声が、彼の唇から零れる。抵抗などはなかった。やはり、こういうことを望んでいたのだろう。

「こんな元気にして、溜まつてるのかしらね？ お相手してくれる女の子がいなくて、毎晩一人で寂しく扱いてるの？ なんてかわいそうなひとなんでしようね？」

衣服がかたどる輪郭に、頬ずりしてやる。挑発的な言葉で煽る。彼は情けなく眉を垂れ下げたが、怒りはしなかった。なるほど、こういう路線が好みか。

「素っ裸で歩きまわってる変態女なら、相手してくれるかもって思った？ ナメてる？」
「うっ」

先端をつつきながら、いたずらな声で問う。彼はうめいた。肉棒への刺激に対する反応だけではないだろう。表情は実に情けなかった。いい顔だ。

凶星だったのだろう。女と縁がなく、かといって郭くわぶに行く勇氣も金もない青年が最後に

頼りにしたのが、謎の痴女の噂だったのだ。こちらからすれば、相当ナメた話だ。

……が、あえて許し、受け入れてやる。今の自分は変態だ。変態はそんな難しいことは考えない。気持ちよければ、自身の性欲を満たせれば、それでよいのだ。

「いいわよ、その金玉の中の汚い汁、搾り取ってあげる」

「ちよ、あっあっ」

下衣に手をかけ、降ろしてやる。上向こうとするペニスが引っかけり、抵抗する。解放された瞬間、ソレは跳ね橋のようにふるんと跳ね上がった。

「ふふ、いいわね」

いいわね、とは言ったが、客観的にみれば普通といったところだ。長さ、太さ、硬さ、たくましさ、どれをとつても大して優れたものではない。だが今、彼女はひどく興奮している。空腹は最高のスパイスといった言葉もあるが、それが彼のペニスを非常に魅力的なものとして演出していた。

すん、すんと、漂う香りを嗅ぐ。男の、あの独特の匂いが肺を満たす。恍惚を覚えた。芳香のお礼に、先端に息を吹きかけ、指でゆっくりと扱き上げる。羽毛でなぞるような、微妙な力加減でだ。彼は腰を震わせる。手玉にとつていた。

「ううッ、うううう」

青年は、呻くだけの生き物になっていた。せつかく得たチャンスが無駄にしたくないと思っているのか、それとも単に、覚えたことのない快楽に戸惑っているのか。十六夜咲夜なら、こんな情けない男はお断りだろう。しかし今はむしろ、好意的に受け止められる。普段から、人の下について奉仕しているのだ。こんなときくらいは、上に立って翻弄してみたかった。

「えるう」

「オッあ!？」

彼の腰が跳ねる。舌を突き出して、鈴口を軽くほじってやったのだ。楽しくなるくらい、分かりやすい反応だった。

「こういうことされるのは初めてかしら？」

「え、あ、は、はいっ」

「あんまり戸惑ってないところを見ると、こういうやり方があること自体は知ってるのね」

「えっと、はい」

「それで？ どうされたい？ 蕩けるくらい舐めてあげましょうか、それとも、しゃぶりつくしてあげましょうか」

「え——」

「それじゃ、両方ね」

言葉を詰まらせた青年に被せるように宣言した。答えられないことは予測していたし、両方提供してやるつもりだった。ただ、想像の余地を与えるためだけの問いだった。彼がこれから実際にされることは、その想像以上だ。

獲物を丸呑みする蛇のように、大口を開ける。これも、十六夜咲夜なら決してしない、品のない行いだ。今の彼女は、どれだけ下品になれるかを競っているかのようだった。

そのまま、勃起した肉棒に一口で根元までかぶりつく。すぐに、口腔内に溜めた唾液を、舌先でたっぷりと絡めにかかると、むちゅ、ぬちゅんと、唇や口の中で粘っつい音が響く。

「おほあッ？ うあ、おおおッ、おおおおおおッ？」

それは彼にとつて、全く未知の快感だったのだろう。嬌声は、疑問符の混じったひどく間抜けなものだった。けれども、その腰ががくがくと震えているあたり、間違いなく快感は感じているようだった。

「ぢゅるッ、ぢ、ちゅ、むうッ」

「ううううううッ！」

シエイクをストローで飲むときののように、頬を窄めて吸い上げる。頬壁や舌で、強烈な圧を加えていく。手を伸ばし、玉袋を掌の中で優しく転がしてやる。突然のツープラトン

攻撃に、彼の聞き苦しい呻き声が響く。初体験の男には、いささか刺激が強かったろうか。だが、彼は決して、苦痛を感じてはいないようだった。なら、問題あるまい。

「ぢゅぶツ、ぐぼ、んもツ、ごふう」

頭を、首を前後させる。空気の抜ける下品な音をたてながら、唇でもって肉幹を抜く。口腔内では、舌が執拗なまでに亀頭を、カリ首を舐め回していく。

彼は何も言わなかった。両手で顔を覆い、頭をぶんぶん振っていた。快楽が強すぎて、声にならなくなっているのだろう。良い傾向だ——何も感じないよりはずっといい。

「んふうううツ」

鼻から息をする。肺へと向かう呼気は、口腔のあたりを通る時に、口内を占領する肉棒の香りをふんだんに含むこととなる。強烈なペニス臭が、彼女の肺胞を満たす。

モノの立派さは平凡でも、漂う男の香りには、女を魅了させるフェロモンがたっぷり含まれているようだった。頭がくらくらし、腹の奥が熱く疼く。もつとこれを味わいたい、あわよくば、最終的にそこから放たれる濁液を味わいたいと、思わずにはいられなくなる。

「くぶつ、……んふツ！ んぐつ、んふう、ぐぼつ」

頭を前後させ、彼のモノを悦ばせようとすればするほど、疼きはどんどんと強くなる。やがて堪えられなくなった彼女の手は、自らの股座に伸びていく。黒い張り型の突き立つ、

はしたなく濡れそぼった女の穴へ。

張り型を掴み、抜き差しする。腰が前後にかくつく。快感は、先の自慰行為とは比較にならなかつた。脳髓まで満たすようなペニスの臭いが、おかずとなつていようだつた。

「うあッ、ああッ、つくう、ああ、うわッ、やばッ、ああ」

手で顔を覆い、それどころではない様子を見せていた彼も、咲夜の——痴女の——様子がおかしいことに気づいたのだろう。こちらに視線を向けてくる。自慰をしているようだと気づいてからは、彼の身悶えはさらに大きくなる。彼女の肉体は、常軌を逸して美しいそんな肉体が、赤ん坊の腕ほどもあるような張り型を使って、ぐぼぐぼと音をたてながら下品に自らを慰めているのだ。これで興奮しないほうがおかしいという話だ。

「ぶふっ」

「え——」

一旦口を離すと、彼は一瞬、どうして？　と言わんばかりの表情を浮かべた。どうしてやめてしまうんだ、と。やめてしまうことを切なく感じるほどに虜になつてくれたことは嬉しいが、杞憂だ。彼女に、奉仕をやめるつもりなど、当然ない。少し趣向を変えようと思っただけのことだつた。

「んちゅむッ、んんッ、むちゅ、んっく、はふう」

「うあッ、あッあッあッ!」

肉竿を横向きに啞え、根元に向けてスライドする。さながら、もろこしを一気食いするときのような動きだった。空いている方の片手は、掌を亀頭に押しつけ、ぐりぐりと刺激していた。唾液が潤滑油代わりになり、にゆるにゆるとぬめる。

それで終わりではない。彼女はそのまま、彼の黒々とした陰毛に鼻先を埋めながら、彼の陰囊を口で愛撫しはじめた。唇で優しく食みつつ、舌先で玉を転がしていく。先ほどと少し違う匂いがする。汗を中心とした、衣服の中で一日中蒸らされて醸造された匂いだ。だがこれも、間違はなく男の香りと言えるだろう。その証拠に、彼女は、頭をハンマーで殴られるような衝撃と官能に、興奮をぐらぐらと揺さぶられていたのだから。

こんなもの味わわされて、興奮せずにはいられるなど、もうそれは女ではないのでは？ そんな風にすら思いつつ、張り型を弄ぶ彼女の手は、さらに激しく動き始める。ぐぢよぬぢよぬぶぬじゅと、肉がこねられる音と空気が混ざる音が股間周りで鳴り響く。蹲踞の姿勢で座り込む彼女の真下の地面には、先ほどマーキングしたときのように、黒いシミができていた。女の匂いが漂っている。それも、発情した女の匂いだ。

「ウウウッ、うつわ、ああああソレッ、ソレやばい、あああああッ」

唾液をローションの代わりとして、にちやにちやにちやと音を立てながら肉竿を

激しく扱き立てる。彼女は相当に器用な部類だが、今、その技巧には、少しばかり狂いが出ていた。脳味噌を侵蝕するスメグマの香りに、自慰によつてもたらされる快樂。それらを同時に受けて、くらくらししないでいられるほうがおかしいのだ。

男は背を反らし、容赦のない責めを堪えている。顔は猿のようにくしゃくしゃになつていた。痴女の性技の精度は幾分落ちていたが、それがかえつて、彼に予測不能なランダムな快感を与えているようだった。

「はあッ、んむっ、れるううッ、射精して、ねえ射精してよ、ほら、ここから、濃い精液、射精してッ、いつでもいいから、はやくう」

睾丸に口奉仕をしながら、そこで作られている濃厚なエキスを求める。薬を求める中毒患者のようだった。仕方ないではないか。こんな、ろくに女と縁のないような冴えない男なら、精子もたいそう溜め込んでいるに違いない。吐き出されるのは、特濃の高級品だ。十六夜咲夜ならまだしも、痴女なのだから、味わいたいと思うのは当然のことだった。

「んぢゆるるるるッ、んふウーッ」

竿を扱き立てながら、亀頭を咥えこみ、舌で舐め回し続ける。蛇のようにくねり回る舌の先端は常に鈴口に押し当てられて、その奥から出てくるであろう白濁を、吐き出されたまさにその瞬間の新鮮な状態で味わいたいのだというように尿道をほじくり返す。

彼女の股座に伸びた手は、まるで彼女自身を責めるためだけに存在する独立した生物であるかのように、張り型を容赦なく突き動かしていた。黒光りする無機物の先端は執拗なまでに子宮口を突き、宙に浮かぶような快楽を与え、無数にあしらわれた瘤は、膣内部を体外へ引きずり出そうとしているかのように、膣壁を抉って抉って抉りまくっていた。

彼女の両膝はがくがくと痙攣し、ダンスでも踊るかのように開閉を繰り返している。腰は、手の動きと連動してより快楽が得られるように、水揚げされたばかりのタコのようにくねり続けている。

「ぐぼっ、ぐぶ、んぼっ、ぐぶう、んごっ……！」

「ううううあ、駄目だ、うあ、もう駄目、アッ、くうううッ……！」

再び一物をしっかりと啜え込み、唇と口壁で扱き上げていく。もはや技巧もなにもなく、ただただ精液をねだるように、情熱的に奉仕するばかりだ。いずれにせよ、彼はほぼ経験のない、欲望をたっぷりと溜め込んだ若者だ。どのような技術水準であれ、遅かれ早かれ、限界は近づいていだろう——このように。

口内で一物が膨らみ、掌の中の金玉が張り詰めるのを感じ、痴女は期待に眉を垂れ下げさせる。それは、男が絶頂を迎える兆候だ。待っていた瞬間がいよいよ来るのだ。

精子一つたりとて無駄にはするまいと言わんばかりに、根元まで啜え、しゃぶる。早く

射精^だしてとせかすように、辜丸に手でマッサージしてやる。限界近くに在る男が、そんな責めに堪えられるはずもなかつた。

「あつあつあつあつあつあつあつ、おあ、ああああああッ、——ああああああ！」
 なんとも聞き苦しい一連の呻きの後、それは始まつた。膨れあがつたペニスの、噴火だ。吐き出されるのは、溶岩のごとき熱を孕んだ、男の欲望そのものだ。張り詰めた辜丸から解き放たれたそれは、輸精管を通つて尿道に至り、そして鈴口から、変態痴女の口腔へと放たれていく。

「んふウツ……！　ぐぼ、がばつ、ごべつ」

ちようど、喉奥のあたりにまでモノを啞え込んでいたところだつた。一番搾りは、喉壁へと叩きつけられる。溜めに溜められたがゆえに、餅を連想させるほどに濃厚になつた、ある意味で最高品質のスペルマを。

餅を嚙まずに呑み込めばどうなるかなど、考えるまでもないことだ。それと同じことが、彼女の喉、食道で繰り広げられた。これ以上ないほど濃厚な精液は、彼女の中に張り付き、胃へと中々落ちていかない。そうしている内に、解き放たれた白濁は後から後からやってくる。彼女は目を白黒させ、えづく。

「うわ、ッ、あ、なんだこれ、止まらなッ、くうッ、——うううッ！」

女の側はそんな状態だったが、だからといって射精は止められるものではない。特に、彼のような、性に不慣れな若者の射精は。びゅるびゅると放たれる白濁は、彼女の口腔内を埋め尽くしていく。無数の精子が、孕ませるための卵子はどれだ、これかと泳ぎ回る。濃厚な精臭が——ペニスを啜っていたときは段違いの精臭が口腔内を満たし、肺を、脳を冒していく。

「——、んッ、んほああああッ……！」

ペニスをしゃぶるといふ行為から、そして口腔内を満たすスペルマから与えられる、これ以上ないほどの興奮。それは彼女を、彼女の身体の動きを狂わせた。

「ごんッ、と、子宮口が殴りつけられた。梵鐘に、撞木を叩きつけたかのようだ。許容量を超えた性的興奮により、腕が誤作動を起こしたのだろう。張り型は、今までにないほど深く、力強く打ち込まれていた。」

ただでさえ、濃密なスペルマに脳味噌まで冒されているような状態だったのだ。そんなソリッドでパワフルな快感をブチ込まれて、堪えられるはずもなかった。彼女は絶頂する。雌穴から汗を噴き散らかし、紙袋の中の人間からは想像もつかない下品な嬌声とともに、快楽の頂点に至った。

両脚はびいんと開かれ、腰は思い切り前に突き出される。背中から首にかけては弓なり

に反り返り、その勢いで、見る者を魅了する美乳はぶるんと揺れてみせる。

解き放たれた彼のペニスは、未だに射精を終えておらず、彼女の顔面へ——被った袋へ白濁をまき散らしていく。ただでさえ異様な有り様が、汚らしいスペルマを被ってさらに異様になる。しかし、彼女はそんなことを気にしていなかった。気にしているだけの余裕がなかったのだ。

自分がどれだけ、愚かなことをしているか——自らの中で列挙する。外で裸になって。能力を縛って。失敗すれば社会的死になるような試みを行って。野小便をした上に、人前でオナニーをし、さらにはこうして、本来なら見向きもしないような見知らぬ冴えない男を誘って、そのペニスをしゃぶって、しゃぶること自体で興奮し、挙げ句、吐き出された精液に悦んでいる。

どれ一つとつても、十六夜咲夜の行いではない。だからこそ、最高だった。誰だって、休みの日くらい普段の立場やしがらみから解放されたいと思うのは当然だ——積み重ねた痴女としての振るまいが、彼女を紅魔館のメイド長という立場から解き放ち、名も知れぬ一人の変態という人格を与えることで、周囲に認められえない本性の発露を許していた。

バネを抑えれば抑えるほど、戻る力は強くなる。彼女の自己主張は、普段メイドという己を殺す仕事に従事しているだけに、より強烈なものとなっていた。

「うあ、はあ……ああ、なんだ、これ、一人で擦るのと全然……ああ」

「あはッ、ああ、んんんう……っ、はあ……」

健康に害があるのではと思ってしまうほど長い射精は、ようやく終わる。彼は張り詰めさせていた全身を脱力させ、近くの塀にもたれかかった。精魂尽き果てたと言わんばかりの表情だった。実際、あれだけの量を射精すれば、尽き果ててもおかしくはない。

一方の咲夜は、これもまたぐったりとして、地面に四つん這いになっていた。その身体は真っ赤で、汗が月光をきらきらと反射していた。背中が上下するのは、荒い呼吸のせいだ。

「ンっ……ぢゅる」

「うわッ、あ、ああ」

けれども、いつまでも惚けているわけにはいかない。後始末が必要だった。魂が抜けたように惚ける彼のモノに、再びしゃぶりつく。尿道に残った白濁を、しっかりと吸い出していく。彼はそれで蘇生したようだった。

「ふはあ」

それが終わると、彼に向けて、己の口内を見せつけた。とれたての新鮮なスペルマが、舌や歯茎にたっぷりと絡まっている。彼の視線は、そこへじつと向けられていた。

口を閉じる。子種でもって口をすすぐ。ぐちゅぐちゅという音が、彼に聞こえるように。

股座で萎えていたはずのモノは、いつの間にやらすっかり元氣を取り戻していた。

「んぐつ、ご、ぐつ、ぐつ」

呑み込んでいく。といつても、簡単なことではない。なにせ餅かと思うほどの粘液だ。唾液を混ぜつつ、少しずつ、少しずつ飲み下していかななくては、窒息してしまいそうだった。「んはあー……げぷつ」

まるまる一分以上はかけたろうか。ようやく口の中のを飲み干し終えた。再び口を開き、彼に見せつけてやる。お前が放った子種が、お前の欲望が、私の身体の一部になるのだぞということを見せつけてやる。胃の底から、精液臭いげつぷが上る。これも、十六夜咲夜なら決して出せなかつたろうものだ。

彼の目は血走っていた。異様な興奮が、そこに現れていた。

「ふう。悪くなかつたわよ。楽しませてくれたお礼に、これでも……んッ……あげるわ」張り型を引き抜く。ぢゅふんと、空気の抜けるような音がした。散々に耕された膣穴は、何も入っていない状態に切なさを感じるようになっていた。

それを、彼に手渡す。愛液にまみれヌラヌラと月光を照り返す棒を。彼はそれとこちらを交互に見比べてきた。目の前の女にさっきまで入っていたものだと信じられないのだとでもいうように。確かにこの状況自体、夢だと思つてもおかしくはないだろうが。

「私はたまに、このあたりで遊んでるから。また会いましょう？ それじゃ」

「え？ ……あ、えっと、はい、それじゃ……」

彼のモノは、先のような痴態を見せてやったというのに、萎えたままだった。口奉仕で、全ての欲望を解き放ってしまったのだろう。

これ以上は楽しめなそうだと、立ち去ろうとする。彼は惚けた顔で、ただ別れを告げるばかりだった。本当に搾り取ってしまったらしい。あるいは、射精の衝撃に、頭が一時的に阿呆になっっているのだろう。ぼけっと突っ立ったままの彼を放置して、その場を後にした。

「さて、と」

リフレッシュしようと、深く息を吸う。袋に絡みついたままの彼の精液によって、新鮮だったはずの空気は、肺に届くまでに精臭を帯びていた。

自分は今、顔面に精液を貼り付けたまま歩いてるわけか——その考えは、彼女の子宮を疼かせる。濡れ濡れの秘部を指先でくちゅくちゅと弄くり回しながら、夜道に行く。

どちらへ向かおうか。鍵を探さなくてはならないが、タイムリミットまではまだだいぶ時間があるはずだ。多少遊ぶくらいなら、問題はあるまい。

「そうだ」

貧民窟スラムに向かうのはどうだろうか。

里の外れに一本、大きな川が流れている。治水の悪さもあり、金を持っている連中は他のところに住みたがる。そのせいで、区域全体が浮浪者、あるいは何かマズい理由で家を持てないような輩の溜まり場となっていた。

まともな者なら近づく場所ではないが——こんな格好でうろつく痴女など、まともとはいえない。彼らのお仲間のようなものだ。自らのアイデアに、彼女はぞくりと震えた。

「うふっ、うふふ、うふふふ……！」

異様な笑いを零しながら、彼女の足は、向かつてはならない場所へと向かっていった。

(続きは本編で！)